

氏名	寺尾 奈歩子 (てらお なおこ)
学位の種類	博士(看護学)
学位授与番号	甲博看第11号
学位授与年月日	令和5年3月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	がん化学療法を受ける2型糖尿病患者の血糖と副作用の自己管理促進プログラムの開発 (Development of a Program to Promote Self-Management of Blood Glucose and Side Effects in Patients with Type 2 Diabetes Undergoing Chemotherapy for Cancer)
論文審査委員	(主) 教授 飛田 伊都子 教授 久保田 正和 教授 鈴木 久美

学位論文内容の要旨

＜ 緒言 ＞

がんと診断され化学療法を受ける糖尿病患者は、治療に伴い変動する血糖と化学療法の副作用それぞれの自己管理が、生命とQOLに関わるため重要である。特に、経口血糖降下薬で治療中の患者は、血糖自己測定の効果に対する根拠が示されていないことから血糖自己測定を行うことが少ない。そのため、化学療法中に体調の異変を感じても、即座に血糖を確認し対処することが困難である。現在、化学療法中の糖尿病患者の血糖変動や副作用、自己管理の状況は明らかになっておらず、支援方法も検討されていない。そこで、がんと診断され化学療法を受ける2型糖尿病患者を対象とした、血糖と副作用の自己管理を促進するプログラムの開発が喫緊の課題であると考えた。

＜ 目的 ＞

本研究は、がん化学療法を受ける2型糖尿病患者の血糖と副作用の自己管理促進プログラムを開発することを目的とし、以下の三部で構成した。

第一部: 糖尿病患者の化学療法中の血糖変動、副作用、自己管理の状況を明らかにすることを目的とした。

第二部: 血糖降下薬を内服中の2型糖尿病患者ががんと診断され化学療法を受ける際、どのように血糖と副作用を自己管理しているのかそのプロセスを明らかにすることを目的とした。

第三部: 第一部及び第二部の研究結果を基に、がん化学療法を受ける2型糖尿病患者の血糖と副作用の自己管理促進プログラムを作成し、その妥当性と臨床適用可能性を評価することを目的とした。

＜ 対象と方法 ＞

第一部では、糖尿病患者の化学療法中の血糖変動、副作用、自己管理の状況について、国内外の25文献を対象に文献レビューを行った。第二部では、血糖降下薬を内服中にがんと診断され、化学療法を完遂した2型糖尿病患者16名に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。第三部は、第一部、第二部の結果を基に、がん化学療法を受ける2型糖尿病患者の血糖と副作用の自己管理を促進するプログラム(以下、プログラム)を開発し、化学療法を受ける糖尿病患者に関わっている医師及び看護師に質問紙調査と面接調査を実施し、プログラムの妥当性と臨床適用可能性を評価した。

＜ 結果及び考察 ＞

第一部の結果として、化学療法中の糖尿病患者は、大幅な血糖の上昇と予測困難な血糖変動がみられ、末梢神経障害や感染症の出現リスクが高く重症化しやすいこと、糖尿病に対する自己管理は、化学療法開始8週間後に低下することが明らかとなった。これらの結果から、化学療法早期から血糖と副作用の自己管理を支援する必要性が示唆された。

第二部の結果として、がんと診断され化学療法を受ける2型糖尿病患者の自己管理は、“身体のコンディションに合わせた血糖管理と副作用対策のバランスを図る”プロセスであった。患者は、治療開始後【未経験の副作用と高血糖に対する困惑】を経験すると、【血糖変動を念頭に置いた副作用との格闘】を始め、【糖尿病経験に基づいた療養法の簡便化】と【副作用の対処法の試行錯誤】を行う。そして、【血糖変動の推移と身体回復のパターンの把握】ができるようになると、【緩急をつけた自己制御に基づく治療への体調の調整】を行い、化学療法を完遂する。さらに、化学療法開始から完遂まで常に【心の安定の維持】を図っていた。

第三部は、第一部、第二部の結果を基に、プログラムを開発した。全体目標を、「がんと診断され化学療法を受ける2型糖尿病患者が、心の安定を維持しながら自分自身で血糖及び副作用のマネジメントを行い、化学療法を治療スケジュール通りに完遂できる」とし、プログラムの構成要素は、①情報提供、②セルフモニタリング能力の獲得、③自己効力感の向上、④心理面のケアの4つとした。介入対象者は、がんと診

断され初めて化学療法を受ける 2 型糖尿病患者のうち、化学療法前は経口血糖降下薬で糖尿病治療を受けていた患者で、特に、治療計画(レジメン)にステロイドを含む患者とした。プログラムは患者との対話を基にした介入とし、介入回数は 4 回とした。化学療法を受ける糖尿病患者に関わっている医師及び看護師 10 名に質問紙調査と面接調査を実施した結果、プログラムの妥当性は、表現の一部見直しや追加、一部の情報提供に関する情報提供実施者の再検討といった改善点が挙げられたが、概ね適切であるという回答を得た。プログラムの臨床適用可能性は、臨床で活用できるかという問いと看護師にとって役立つかという問いの両方に肯定的な評価を得た。これらから、プログラムの妥当性と臨床適用可能性は概ね認められたと考える。

《 結論 》

本研究により、化学療法中の糖尿病患者の血糖、副作用、自己管理に関する知見を統合した後に実証研究を行うという段階を経てプログラムが開発された。プログラムは、患者の実態に即した内容であると考え。今後、洗練したプログラムを活用することによって看護師の効果的な援助が可能となり、患者の血糖と副作用の自己管理が促進され、化学療法を受ける糖尿病患者の QOL が向上することが期待できる。今後の課題は、プログラムをより洗練化し、介入研究によるプログラムの効果と有用性を検証することである。

論文審査結果の要旨

本研究は、がん化学療法を受ける 2 型糖尿病患者を対象に、治療に伴い変動する血糖と化学療法の副作用の両方の自己管理が要求されることに注目し、自己管理の状況把握およびその支援方法について検討した研究である。第一部の研究では、糖尿病患者の化学療法中の血糖変動、副作用、自己管理の状況を明らかにすることを目的とし、25 文献を対象に文献レビューを行い、血糖上昇に伴い血糖降下薬の増量や追加投与を受けていたこと、末梢神経障害や感染症の出現リスクが高く重症化しやすいこと、食欲不振や嘔気、倦怠感が重症化傾向にあることを明らかにした。第二部の研究では、化学療法を受ける 2 型糖尿病患者が、どのように血糖と副作用を自己管理しているのかについてのプロセスを明らかにすることを目的に行われている。その結果、自己管理は“身体のコンディションに合わせた血糖管理と副作用対策のバランスを図る”プロセスであることを明らかにしており、患者は、治療開始後【未経験の副作用と高血糖に対する困惑】を経験すると、【血糖変動を念頭に置いた副作用との格闘】を始め、【糖尿病経験に基づいた療養法の簡便化】と【副作用の対処法の試行錯誤】を行う。そして、【血糖変動の推移と身体回復のパターンの把握】ができるようになると、【緩急をつけた自己制御に基づく治療への体調の調整】を行い、化学療法を完遂する。さらに、化学療法開始から完遂まで常に【心の安定の維持】を図っていたことを明らかにした。これらの結果をもとに第三部の研究では、がん化学療法を受ける 2 型糖尿病患者の血糖と副作用の自己管理を促進するプログラムを開発し、その妥当性と臨床適用可能性を評価している。その結果、プログラムの目標、構成内容、介入技法、介入時期、介入回数、各介入の妥当性について、概ね肯定的な評価が得られている。今後は、プログラムを洗練化し、介入研究による臨床での効果と有用性を検証することにより患者の QOL 向上に寄与できる研究であると期待する。

以上により、本論文は本学大学院学則第 13 条第 3 項に定めるところの博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Asia-Pacific journal of oncology nursing 10(2): 100172, 2022